

室戸大型定置網の近年の漁獲状況 ～特にキハダについて

林 芳弘（室戸漁業指導所）

室戸岬東岸の4地区で営まれる大型定置網は、当漁業指導所管内において、最も主力となる漁業である。

当大型定置網の漁獲物に関する知見は過去に報告されており（林・田ノ本 2023）、2010～2021年の期間の漁獲量では、ブリ、マルソウダ、ゴマサバの3種が特に多いこと、黒潮大蛇行の発生を境としてキハダが急増したことが明らかとなっている。今回は、それ以降の漁獲状況について報告する。

2020～2025年の期間、漁獲量ではブリが多く、2020年と2021年で1位となったが、2025年は3位に陥落した。同年の1位はマルソウダであった。キハダは2022年以降、毎年上位10位に入るようになった。

キハダの漁獲量の経年変化を示したところ、2010～2016年の期間は数トンから10トン程度だったものの、2017年には約50トンに増加し、さらに2022年以降は200～300トンとなった。キハダの年ごとの漁獲金額は、2022年以降、ブリに次いで2番目に高くなり、特に2023～2024年には年間漁獲金額全体の2割前後を占めた。

太平洋沿岸の各県において、大型定置網によるキハダの漁獲量を調べたところ、多くの県で2023年から増加が認められた。この結果から、本邦海域へのキハダの来遊量が全国的に増加していることが示唆された。また、全国の漁獲量のうち室戸が占める割合は、2016年までは概ね10%前後で推移していたが、2021年以降は21～56%に増加しており、本県沿岸における来遊量が特に増えていることが窺えた。

全国的な来遊量の増加については、中西部太平洋海域全体の資源状態が比較的良好なことが背景にあると推測される。さらに、気候変動による近年の海水温上昇も、キハダの来遊には好条件であるといえる。

本県沿岸で特に来遊が多かった原因は不明だが、近年はカツオの出現が豊富だったことから、それらを餌とするために多くのキハダが集まった可能性が考えられる。また、黒潮大蛇行の発生以降、黒潮内側域の面積が年々増加して2022年頃に最大となり（鈴木 2024）、それに伴うようにキハダの漁獲量も増加していることから、海況変化が来遊に関連している可能性も示唆される。ただし、海況変化によってキハダが増加するメカニズムは全く不明であり、今後の課題である。

月ごとのキハダの漁獲量を示したところ、季節的な規則性は認められなかった。ブリやマルソウダでは漁獲量が増加する時期が毎年決まっており、季節的な回遊行動に伴う入網であることが示唆されるが、キハダはこれらの魚種とは異なり、偶然の来遊による入網であることが窺える。キハダを水産資源として利用するうえでは、こうした特性に応じた販売戦略を検討する必要があると考えられる。